

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第157号

イザヤ 65:1

平成20年10月31日

---

さて、ある人々がユダから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って、割礼を受けなければ、あなたがたは救われないと」と教えていた。そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった…激しい論争があって後、ペテロが立ち上がって言った。「兄弟たち。ご存じのとおり、神は初めのころ、あなたがたの間で事をお決めになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされたのです。そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです…私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。」…ヤコブがこう言った。「兄弟たち。私のいうことを聞いてください。神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民をお召しになったかは、シメオンが説明したとおりです。預言者たちのことばもこれと一致しており、それにはこう書いてあります。『この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直し、それを元どおりにする。それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めるようになるためである。大昔からこれらのことを知らせておられる主がこう言われる。』

使徒の働き 15：1-18

キリスト信仰が異邦人たちの間に広まっていった西暦一世紀、エルサレム初代教会の長、ヤコブがアモスの預言を引用して語った「**ダビデの幕屋（天幕）**」をどのように解釈するかで、今日二つの見解があります。ほとんどのキリスト教会はこの預言を霊的に捉え、「ダビデの天幕」とは教会やキリスト教関係のミニストリーのこととで、福音伝道の奨励、世界的な祈りの勧めが示唆されているとし、教会の霊的覚醒を預言する聖句として解釈、用いています。ダビデ王の崇拜形式に因み、ダンス、打楽器、弦楽器、肉声を用いてのにぎやかな賛美、礼拝を奨励する「祭司」としての教会、また、預言に焦点を置いた礼拝形態で、神の使者「預言者」としての役割を果たす教会、さらに、キリストの王国をこの世にもたらす大使、この世を支配する「王」としての教会の働きの三つの位相を兼ねそなえる教会形成で、ダビデの幕屋が完成されるというわけです。新約によって、神の民イスラエルの役割は終わり、イスラエルに取って代わったと信じる「教会」は、伝道、霊の交わり、教会作りをスローガンに、リバイバルで、神の支配をこの地上にもたらすことができると信じています。ダビデの天幕の霊的解釈は、礼拝、賛美、祈りの形態、教会のあり方を、ますますこの世に受け入れられる改善へと導いているようです。

しかし、もう一つの見解は、「**ダビデの幕屋**」を文字通り、イスラエル史において実際用いられた仮庵、天幕とみなすものです。したがって、ヤコブがアモス書を引用した意図を、終末の末期、ユダヤ人のメシヤ、イエス・キリストの二度目の来臨である「再臨」（御降誕が最初の来臨で「初臨」と呼ばれる）によって、旧約時代のダビデの幕屋が復興し、この地上にユダヤ人の王国が樹立することへの言及と捉えます。ユダヤ人の王キリストが支配するこの新しい時代には、キリストを約束のメシヤとして受け入れ、キリスト信徒となったユダヤ人たちが「証人」として意欲的な大宣教を繰り広げることになるので、全世界の異邦人諸国はみな、キリストを主として、また、王として受け入れ、キリスト信仰に生きることになるのです。

初代教会の時代、異邦人の間で神が奇蹟のわざを伴って大きな働きをしておられることを目撃したパウロとバルナバの証しに答えて、ペテロ（ヘブル名では「**シメオン**」）が、救いはもはやユダヤ人だけに留まるのではなく、聖霊の働きによって異邦人が救われ、召名を受ける時代に入ったことを認める発言をしたのを受けて、ヤコブが預言的洞察で、全人類が救われるメシヤの時代に言及したのが、冒頭のくだりでした。ヤコブが引用したアモスの預言は、「その日、わたしはダビデの倒れている仮庵を起し、その破れを繕い、その廢墟を復興し、昔の日のようにこれを建て直す…」（アモス書9：11）で、明らかに、「その日」、すなわち、来るべきメシヤの時代に成し遂げられるダビデ王国復興に言及したものでした。したがって、ここでヤコブが告げようとしたのは、「**神が初めに…この後**」という表現から明らかのように、この世に全世界的なキリスト教国が樹立するというのではなく、まず、神が異邦人に働かれ、異邦人の中から神の御手によって召される者たちが現れ、次に、キリストご自身の再臨によって「**ダビデの幕屋**」が復興、すなわち、ダビデ王国が再現し、全世界を支配するという預言の成就が間近になったということでした。

1400BCE、イスラエルの民がヨルダン川を渡って約束の地カナンに入ったとき、民の先頭を行ったのは、祭司

たちにかつがれた「主の契約の箱（あかしの箱）」でした。カナン入り後、民が最初に宿営したのは、エリコの東の境の地ギルガルで、しばらくの間、「モーセの幕屋」もそこに置かれていましたが、その後、シロに移されました。その後ペリシテ人の支配が及ぶまでは、シロは永遠の聖所でしたが、預言者サムエルの時代、イスラエル人は、「契約の箱」をもっと安全な場所に移した方がいいと考えるようになっていました。サムエルが仕えた祭司エリの時代に、イスラエル人にとって一番大切な神の御臨在の場である「主の契約の箱（あかしの箱）」がシロから奪われ、ペリシテ人の手に渡るといふ大事件があったのでした。しかし、神のご介入で、ペリシテ人の町々に大恐慌が引き起こされたことにより、ペリシテ人の野に七ヶ月捨て置かれた後、「契約の箱」は再びイスラエルの許に返されたのでした。その後祭司の手で保管された後、ノブを経て、エブス人の要塞から北西に15kmのギブオンに移され、しばらくの間用いられたのでしたが、時代とともに「モーセの幕屋」は姿を消すこととなります。

ダビデが勝ち取ったエブス人の要塞シオンは開発され、ダビデの都エルサレムとなり、今日、イスラム教のオマルモスク（岩のドーム）が立っている「神殿の丘」にダビデ王が、「契約の箱」を収納する天幕を新たに設置したことにより、出エジプト以降用いられてきた「モーセの幕屋」は次第に「ダビデの幕屋」に取って代えられるようになったのでした。しばらくの間は、ギブオンとエルサレムに置かれた両方の幕屋が宗教儀式のために用いられていたことが列王記、歴代誌の記述から分かりますが、ソロモンが神殿を完成した時点で、幕屋は、すべての聖なる用具とともに神殿に移され、そこで、祭司によって管理、用いられることになったのでした。列王記第一8:1-8の叙述、「**ダビデの町シオンから主の契約の箱を運び上げるためであった…イスラエルの長老全員が到着したところで、祭司たちは箱をにない、主の箱と、会見の天幕と、天幕にあったすべての聖なる用具とを運び上った…祭司たちは主の契約の箱を…ケルビムの翼の下に運び入れた…そのかつぎ棒は長かったので、棒の先が内堂の前の聖所から見えていたが、外からは見えなかった。それは今日までそこにある**」は、「モーセの幕屋」がどうなったのかに触れていませんが、「ダビデの幕屋」や「契約の箱」、また、付随する用具のすべてが神殿に移され、聖なる遺物として保存されたことは明らかです。ユダヤ人の伝統では、預言者エレミヤが列王記の著者とされていますから、執筆時は610-600BCEのバビロン捕囚の頃となり、ソロモンがエルサレム神殿での崇拝やいけにえの儀式を始めてからおよそ三百五十年も後に書かれたこととなります。しかし、今日、依然として行く先が分からず、二千六百年にもわたって探究が続けられている「契約の箱」が、エレミヤの時代にはまだ存在していたことは明らかです。その後行方不明になったのですが、聖書外典のマカバイ記は、バビロン捕囚の直前にエレミヤが「契約の箱」やそのほかの重要な遺物、神殿用具を安全なところに移動したことを記しています。

ヤコブはアモス書の引用で「ダビデの幕屋」の修復とダビデ王国の復興を語りましたが、アモスがこのことを預言したのは、エレミヤよりほぼ百七十五年前の755BCEで、注目に値するのは、「ダビデの幕屋」がまだ隠されてもおらず、健在であったときに、すでにはるか遠未来の修復のことが語られていたということです。アモスがこの預言を語った文脈は、神に反逆する者の滅びとイスラエルの復興に言及している箇所です。ヤコブはアモスの用語「**その日**」を「**この後**」と言い換えて、主の再臨によってもたらされるメシヤの時代に関連づけたのでした。神に反逆する異邦人の諸王国が地上から一掃された後、キリストが支配するユダヤ人王国、「地上に成就する神の国」が到来し「**その日には、耕す者が刈る者に近寄り、ぶどうを踏み者が種蒔く者に近寄り。山々は甘いぶどう酒をしたたらせ、すべての丘もこれを流す。わたしは、わたしの民イスラエルの繁栄を元どおりにする。彼らは荒れた町々を建て直して住み、ぶどう畑を作って、そのぶどう酒を飲み、果樹園を作って、その実を食べる。わたしは彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが彼らに与えたその土地から、もう、引き抜かれることはない**」（アモス書9:13-15）と、神が宣言された公義、正義が実践される平和で繁栄の時代が具現するのです。

アモスが用いたヘブル語からも、「ダビデの仮庵（幕屋）」は実際の天幕への言及で、霊的に解釈されるものでないことは明らかですが、出エジプト以降荒野で用いられてきた「モーセの幕屋」とも違うことは、以上考察したように、イスラエル史から明らかです。ダビデがなぜそのような新しい天幕を作ったかを歴代誌16:1が明らかにしています。「**こうして、彼らは神の箱を運び込み、ダビデがそのために張った天幕の真ん中に安置した。それから、彼らは神の前に、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげた。**」ダビデの天幕はモーセのとは違って、仕切りのない部屋から構成され、「契約の箱」を収めるためにデザインされたものだったようです。しかし、ダビデ自身、その天幕が一時的なものであることを知っており、預言者ナタンに「**ご覧のように、この私が杉材の家に住んでいるのに、主の契約の箱は天幕の下にあります**」と不満を訴えたのでした。神はダビデに答え、その子ソロモンが神殿を築き、「契約の箱」を神殿の至聖所に安置することになることを約束されたのでした。

1983年、イスラエルの考古学者アシェル・カウフマンが、神殿の丘に立っている「スピリッツのドーム」(the Dome of the Tablets)の位置がちょうど、かつてのソロモンの神殿の至聖所の基岩上にあると発表して以来、未来のエルサレム第三神殿はここに建てられるのではないかとされています。昨今、エルサレムのサンヒドリンは、ダビデの天幕の例にならって、まず一時的な天幕を建て、その後、本格的な神殿を建てるという案を真剣に検討し始めているようです。もしダビデの天幕が発見されれば、勿論、間違いなく用いられることになるでしょう。